

Typoに基づく語形成の考察

その他のタイトル	Word-Formation Based on Typo
著者	萩澤 大輝
雑誌名	東京大学言語学論集 = Tokyo University linguistic papers (TULIP)
巻	41
号	TULIP
ページ	31-50
発行年	2019-09-30
URL	http://doi.org/10.15083/00078579

Typoに基づく語形成の考察

萩澤大輝

hagisawa_daiki@yahoo.co.jp

キーワード：再分析 破片辞 セクリーション 打ち言葉

要旨

現代英語の特にインターネット上の談話において、行為を表す語の末尾に-oをつけるという語形成パターンが観察される。この-oは**typo**という語の再分析によって生じた新たな形態素(いわゆるsplinter)であり、「エラー」の意を表す。先行研究の観察、記述、説明はいずれも不十分で、過剰生成・過少生成に陥る不備がある。本稿は観察対象を大幅に増やし、**typo**を典型とした放射状カテゴリーを想定することで適切な記述ができると指摘し、この語形成をめぐる論点のいくつかに説明を与える。

1. はじめに

本稿は、語末に-oがつき「エラー」の意を表す語形成を考察する¹。これは基本的にインターネット上の談話で観察される。一例として、scanに-oのついたscannoの実例を示す。

- (1) The content is enthralling. However, there are numerous instances of the word “time” being wrongly used for “the”; this situation becomes increasingly annoying with each additional instance. There are also many other errors which may be **scannos**. Proofreading is needed. (Amazonのレビュー²)
- 内容は面白いです。ただ、**time**という語が誤って**the**のかわりに使われているケースがたくさんあり、この取り違えに出くわすたびイライラがつのります。他にもミスが多く、おそらくスキャンした際の誤字でしょう。校正した方がいいです。

この語形成で用いられる-oを「エラーを表す-o」と呼ぼう。本稿の目的はこの語形成パターンを観察、記述、説明することである。分析の枠組みとしては認知言語学を採用する(萩澤 2018, 野中・萩澤 近刊)。

構成を述べる。2節は**typo**という語が成立するまでの経緯を見る。3節は先行研究を検討する。4節で-oの実例を観察し、5節・6節でその記述と説明を提示する。7節はまとめとする。

¹ 本稿は、「Typo, thinko, scanno: エラーを表す-oの記述」日本言語学会 第157回大会口頭発表(京都大学、2018年11月17日)を発展させたものである。コメントをくださった会場の方々に感謝します。

² www.amazon.com/gp/customer-reviews/R30HZ4Y3Y2NEWH?ASIN=1375892916 (以下インターネット上の例に関して最終確認日はすべて2019年4月9日であり、強調は萩澤による)。

2. typoができるまで

本節ではエラーを表す-oの前史として**typo**という語の成立過程を確認する。この語は一般に **typographical error** という句を省略したものと見なされているが、観察者（分析者）の立場を採用すると別の見方が可能となることも主張する。

Oxford English Dictionary (OED) にも記載されている通り、現代英語には形態素-oが慣習化している。OEDの記述を参考にまとめると以下のように整理できる。用法1・2は特に英国およびオーストラリアの英語に特徴的である³。

(2) 用法1 : abbreviation

連結母音-o-あり	memo (< memorandum)	photo (< photograph)
連結母音-o-なし	ammo (< ammunition)	combo (< combination)
用法2 : familiarity	cheapo (< cheap)	kiddo (< kid) wino (< wine)
用法3 : interjection	cheerio (< cheer)	goodo (< good) righto (< right)

用法1は、連結母音-o-を持つ語に対して、-o-の後続部分を省略することで生じたものである。OEDで初出年を見ると、この種の省略は18~19世紀に特に盛んに行われたことが分かる。

- (3) hypo (< hypochondria, 1701) memo (< memorandum, 1705)
 compo (< composition, 1823) photo (< photograph, 1860)

次第にこの省略パターンは適用の制約が弱まり、**combo** (< combination, 1929) など連結母音のない語も-oによる省略の対象となった。連結母音の残滓だった-oが省略標識になったのである。さらに省略ですらなくても-oが付加されるようになる（用法2）。用法3の-oは間投詞に由来するため起源は別だが、口語的な意味合いが用法1・2と共通しており、OEDも同一の見出しのもとに扱っている。

さてOEDの記述を見る限り、**typo**という語は最初期において **typographer**（植字工）の略として使用されていた（用法1）。そしてその数十年後に、ようやく **typographical error**（誤植）という意味での使用が見え始める。以下、それぞれOEDの初出例を示す。

- (4) [Printers] will confer a favour on a brother **typo** [etc.]. (*Massachusetts Spy*, 1816)
 (5) My men .. don't like to pass anything till it's free from **typos**. (*Children of Ghetto*, 1892)

少し妙なのは、誤植を表す**typo**の成立が、OEDをはじめ一般に**typological error**という「句」の省略とされる点である。(3)から明らかのように-oで省略されるのは通例「語」である。そのため

³ 機能の類似した接辞に -ie/-y があり、Commo/Commie (< Communist) や Johnno/Johnnie (< John) のように -oと互換的なことがある。条件が同じであれば、-oの形式は女性よりも男性による使用が多い (Peters 2007: 563)。

句の省略説が正しければ、誤植を表す**typo**は例外的な語形成ということになる。この不自然な扱いを回避するにはどうすれば良いだろうか。

ここで観察者と使用者の区別が有効である。通時的な経緯を知らない一般の言語使用者は、ある語を学習してから、その意味をたよりに当該語の由来を素朴に推測することになる。この場合「省略」とは歴史的事実とは独立に一般の話者が想定する語の来歴であり、**typo**の省略前の形式として句が推測されたとしても何ら問題ない⁴。一方、観察者の立場を採用すると、まず **typographer** という語の省略として **typo** という形式が共同体に導入され、その形式が誤植という (**typographical error** という句で表現される) 意味を伝えるのに流用されたことと記述できる⁵。こう考えると句の省略という想定を避けることができる。

この流用は、何かしらの橋渡し文脈で用法1から用法2に再分析された(聴者ベース)とも、誤植の意を伝えようとした話者が用法2を意図して**typo**を用いた(話者ベース)とも考えうる⁶。これを確定するのは筆者の力量を越えており、これ以上は追究しない。なお、筆者は唯一的原因により再分析が生じたと考える必要はないという立場である。

いずれにせよ何らかのきっかけで**typo**に誤植の意味が慣習化すると、語末の**-o**はもはや **typographer** の連結母音が残ったものとは理解されなくなる⁷。ここに、**typo**の**-o**がエラーという語彙的な意味を持った形態素であると再分析される契機がある。この**-o**が語形成にも活用されることで本稿が扱う新語が生じた。こうした再分析によって生じるタイプの新規形態素を **splinter** という(暫定的に破片辞と呼ぶ)。次節ではこの破片辞をめぐる先行研究を検討する。

3. 先行研究

3.1. 破片辞一般について

まずは定義を示す。本稿が採用するのはBauer et al. (2013) による次の規定である。

- (6) [O]riginally (mostly) non-morphemic portions of a word that have been split off and used in the formation of new words with a specific new meaning. (Bauer et al. 2013: 525)

⁴ ある2語について、一方から他方に数的同一性を保ちつつ変化した(e.g. 省略された)と感ぜられる場合、それは客観的に成立する関係ではなく、概念化者による同一性認識の結果である。タイプとしての語は物理的な存在者ではなく、いわゆる省略などの「変化」が起きる前後の形式に客観的な数的同一性はないからである(もちろん語のトークンは物理的だが、記録音声や文字列などを短くすることは語形成としての省略ではない)。つまり語の「省略」(ひいては派生・屈折一般)は主観的变化である。これに自覚的でない者は語の素朴実在論を採っていることになる。語の存在論についてはBromberger (2011)などを参照。類比的な現象としては、独立光点の明滅が同一光点の移動として認識される「仮現運動」がある(省略は状態変化、仮現運動は位置変化)。

⁵ なお現代英語の**typo**、現代日本語の「誤植」はともに活版印刷と無関係の誤字を指せる。これは世界的変化に応じた意味的漂白の一種である。かつての事物の名称が形態素として残る事例としては「筆箱」「下駄箱」「網棚」などがある。

⁶ 後者の場合、当時すでに存在していた**typo**という語の音韻極に自覚的であった可能性がある。バクロニム(**backronym**)など、音韻極に動機づけられた語形成はままある。

⁷ 現にRoberts and Sylvester (2017: 34)は“The very term *typo* is a diminutive and suggests that these are small and unimportant errors.”と記述し、**-o**を指小辞扱いしている(本稿の整理では用法2)。なお筆者のインフォーマントも**typo**は**error**などよりも婉曲的に誤りを指せる語用論的な利点があるという旨のコメントをしている。

同書のp.19にも “A splinter is a portion of a word that is non-morphemic to begin with but has been split off and used recurrently on new bases (free or bound).” という定義があり、(6) とほぼ同旨であるが「もとは形態素でない」と断言する点でより強い規定である。バウアーら自身を含め、一般に破片辞と見なされる-scapeや-gateなどは形態素境界に沿った切り出しであるため⁸、mostlyという留保のある方が適切である。

splinterは比較的新しい用語である。これに相当する用語はこれまでも考案されてきたが、近年はsplinterに収斂してきている。参考までにCallies (2016: 502) によるリストを整理して示す。大文字や注意喚起の引用符 (scare quotes) の有無は原文ママ。

- (7) 連結辞系 combining form, secreted {affix/combining form}
 接尾辞系 suffix, “suffix”, semi-suffix, pseudo-suffix, suffixoid, {unconventional/splinter-originating} suffix, suffix-like {formative/element resulting from secretion}
 その他 folkmorph, “Intermorphem”

以下すぐに見るように破片辞は語彙的な意味を持つため、その点で連結辞 (combining form) と近く、また基本的に語末に生起する点では接尾辞と近い。なおセクリーション (secretion⁹) という用語が見えるが、これはJespersen (1922: 384, XIX. §13) に由来する用語であり、語の一部が民間語源的に切り出されるプロセスのことをいう (cf. Warren 1990: 117)。

具体例を示そう。Bauer et al. (2013: 526-8) で言及されている破片辞は以下の通り。その一部を詳しく表1で取り上げている。モデル語とは破片辞が切り出されるもとなった語のことで、タイプ数は同書がリストしている具体例の異なり語数である¹⁰。

- (8) 破片辞の例 -ati, -bot, -burger, -delic, -holic, -illion, -tarian, -licious, -matic, -o,
 -orama, -rific, -scape, -stan, -tainment, -tronic, -ware, -zilla

表1. 破片辞の詳細 (Bauer et al. 2013: 526-8)

破片辞 (< モデル語)	意味	具体例	タイプ数
-ati (< literati)	エリート	jizzerati, Twitterati	10
-burger (< hamburger)	バーガー	fishburger, tofuburger	18
-delic (< psychedelic)	サイケな	folkadelic, simple-delic	10
-holic (< alcoholic)	~中毒者	chocoholic, yogaholic	11

⁸ 現代英語の母語話者が意識しているかは疑問だが、landscapeとWatergateの語構成はそれぞれlandとscape、Waterとgateによる複合語である。

⁹ 2種類ある邦訳のうち、市河・神保訳は「分泌」、三宅訳は該当箇所未刊。興石 (2018) は「滲出」とする。

¹⁰ 同書はモデル語と具体例とを明確に区別した書き方ではなく、またモデル語は必ずしも一つに決まらない (-illionなど)。したがって表1のタイプ数にはモデル語を含めた数を記載している。

-tarian (< vegetarian)	～食主義者	eggitarian, fruitarian	7
-licious (< delicious)	魅力的	diva-licious, pig-a-licious	11
-matic (< automatic)	自動	dripomatic, vete-o-matic	12
-o (< typo)	言語産出エラー	typo, speako	2
-scape (< landscape)	～の景色	cityscape, soundscape	15
-tainment (< entertainment)	娯楽	edutainment, kid-ertainment	22

バウアーらによると、破片辞を用いた新語はかなり奇抜に感じられ、他の語に比べても注目を引きやすいという。また、記憶されている形式に比べ認識・解釈に処理労力がかかるように思えるとの内省報告もしている (ibid.: 529)。この点については6.2節で改めて検討を加える。

3.2. エラーを表す-oについて

確認できる限りではLópez Rúa (2007)、Bauer et al. (2013)、Mattiello (2017) に、エラーを表す-oへの言及が見つかる。

López Rúa (2007: 149) はscannoとmousoという2語の存在を指摘し、語末の-oはtypoに由来するもので「エラー」の意を表すと述べる。早い時期に-oに気づいて基礎的な記述をしたことは評価されるが、この記述だけでは過剰生成に陥る。すなわちエラーの生じる行為は無際限のに対し、-oのつく語は限定的である。

Bauer et al (2013) は上表のように-oが「言語産出エラー」 (language production error) を意味すると記述する。これは同書にあるtypoとspeakoに限っては妥当だが、clicko (オンライン囲碁でのクリックミスによる悪手) など、言語産出とは無関係のエラーを表す語は容認されないと誤った予測 (過剰生成) をしてしまう。

Mattiello (2017: 136) はバウアーらの挙げるspeakoの他、Rice University Neologisms Databaseにwriteoの例があると報告する。また新造語の使用域として専門・若者・報道・文学を区別し、speakoとwriteoは若者言葉 (juvenile language) に属するとする。これもこの2語については妥当だが、次節で見るとthinkoが学術用語としても使用されるといった事実は見逃されている。また類推に基づく語形成 (-oによる語形成もこれに含まれる) では、聞き手がモデル語を復元できるよう新造語とモデル語の間には類似性が必要だと主張する。これは復元性 (recoverability) と呼ばれ、“the capability that a hearer has to identify the model of an analogical formation which a speaker has produced” と定義される (Mattiello 2017: 55)。しかしこの点についても、-oによる語形成に関しては重要性がさほど高くない (4.6節で取り上げる)。

以上、きわめて簡単に概観したが、観察する語の数が少ないまま一般化すると言語事実から乖離するきらいがある。より実態に即した記述ができるよう、次節では詳しく調査を行い、観察語数を増やすことにする。

4. 観察

本節では、まず4.1節で本稿が採用した-oによる語の収集手法を述べる。続く4.2節で大まかな結果を提示し、4.3節以降は、各年代における語形成の例とその特徴を順に見ていく。

4.1. 調査方法

-oによる語形成は控えめに言ってもかなり周辺的であり、母語話者の内省やコーパスによる調査はあまり効率的でない。そこで本稿が調査に活用したのがオンラインの辞書サイトである。この利点として (i) 該当語を多く収集できる、(ii) 横断的調査によって簡易的ながら慣習性が調査できる¹¹、(iii) 使用され始めた時期が大まかに特定できる、などがある。参照したサイトは以下の通り¹²。

- (9) a. Free On-Line Dictionary of Computing (FOLDOC)
- b. WordSpy (WS)
- c. Wiktionary (Wt)
- d. Merriam-Webster Open Dictionary (MWOD)
- e. Urban Dictionary (UD)

特に活用したのはUrban Dictionaryである。site:<https://www.urbandictionary.com> typoと検索して typo というキーワードを含む同サイトの項目を収集し、本稿に関連する語を目視で確認した。そうして得られた語を他のサイトでも検索した。以下、便宜上3つの時期を呼び分ける。第1期（1990年代まで）、第2期（2000年代）、そして本稿執筆時の第3期（2010年代）である。第2期までの語は複数のサイトにわたって立項されている場合があるが、第3期の語が確認されるのはもっぱらUrban Dictionaryである。

なお、Urban Dictionaryには各項目にユーザーによる二値的な賛否評価の欄があり、慣習性・容認性を推測する貴重なデータとなる。ただし数値の解釈は注意を要する。投票総数が少ない語は非慣習的と見なせるが、投票総数が多くても慣習的とは限らない。Word of the Day（語を日替わりで紹介するサービス）への選出など、何らかの原因で閲覧者が急増しただけかもしれない。また、見出し語自体への評価と意味記述への評価は区別しづらい。さらに、高評価が容認性の反映ではなく語形や意味記述の面白さ・巧みさへの評価である可能性もある。事実、Kaufman（2013）はUrban Dictionaryにおいて肯定評価がなされる理由の第1位は「面白さ」だとする説を紹介している。これらを踏まえたうえで調査結果を見よう。

¹¹ ただし辞書サイト同士が相互参照している場合があるため、複数サイトでの立項を安易に慣習性の現れと受け取るのは危険である。例えばthumb（親指でのミスタイプ）はWordSpyとUrban Dictionaryとに掲載されているが、前者は後者への投稿を（つまり実例ではなくUrban Dictionaryへの投稿自体を）初例としている。

¹² (a) foldoc.org/ (b) www.wordspy.com/ (c) en.wiktionary.org/wiki/Wiktionary:Main_Page (d) nws.merriam-webster.com/opendictionary/newword_display_alpha.php (e) www.urbandictionary.com/

4.2. 第2期までの概観

第2期までの主要な語をまとめたものが表2である。空欄は立項なし、太字は各サイトの初例を横断的に見たうえでの最初年である。第1期の語についてはすべて、第2期の語は複数サイトで確認される語に限って掲載している。ただし複数のサイトとは言ってもUrban DictionaryとMerriam-Webster Open Dictionaryとに掲載されている語は省いてある。他のサイトに比べて掲載されやすいため、慣習性の根拠として弱いためである。

Urban Dictionaryにおける評価は括弧内に（賛-否）の順で値を示した。1つの見出し語のもとに複数の投稿がある場合、最初年と最多投票をそれぞれ選んで記載しており、両者は必ずしも一致しない（たとえばthinkoの初出は2005年だが、評価値はより総数の多い2006年の値を記している）。

表2. 各語の意味、立項の有無、初出年

	代表的な意味	FOLDOC	WordSpy	Wiktionary	MWOD	Urban Dictionary ¹³
writo ¹⁴	手書きでの誤字		1993	1993	2006	2004 (27-3)
speako	言い間違い		1993 ¹⁵	2012		2004 (28-7)
clicko	クリックミス			1994	2007	2005 (21-2)
scanno	OCRによる誤字	1995		2005	2006 ¹⁶	
thinko	考え違い	1996		1998	2007	2005 (1909-5805)
mouso	マウス操作ミス	1996				
braino	考え違い	1996				2010 (44-5)
spello	綴りのミス			2003	2005	2005 (17-2)
hearo	聞き間違い			2014		2005 (6-6)
thumbbo	親指での誤字		2009			2009 (12-130)

上記の語は、brainoとmousoを除いておおむね実例が容易に見つかる。したがって、エラーを表す-oによる語のなかでは比較的定着していると言える¹⁷。そのため次節で行う記述では、上表にあるような語が容認されやすく、その他の語は容認されにくいことを正しく予測できる方法を模索することになる。

¹³ 一部の語が大文字で立項されているが、特に断りなく小文字に統一している。

¹⁴ Mattiello (2017: 136)にあるwriteoは表記揺れである。ここではより一般的な、語末にeのない形を採る。

¹⁵ WordSpyは初出を1995年とするが、writoの初例に挙げられる1993年の文中にspeakoが含まれている。それを踏まえてここでは修正した年を掲げている。

¹⁶ scanoという綴りで投稿されている。

¹⁷ thinkoとbrainoの評価値について補足する。以下で見るようにthinkoの慣習性はかなり高いが、とはいえ主にプログラミングやオンライン囲碁、哲学などの分野での用語であるため、一般投票では否定評価が肯定を上回っていると考えられる。逆に、brainoは肯定が否定を上回っているが実例には乏しい。そのため容認性とは別の要因での高評価と見るのが妥当と思われる。

4.3. 第1期：仲間内のスラング

第1期の語は、本稿の執筆時である第3期とは少し違った語形成が行われていたと思われる。当時のプログラマーによる造語とされる *mouso* と *braino* は、2019年現在、純粋な用例がほぼ見つかからない。この2語が廃れた理由については5節で考察する。

-oの使用が始まった当初は、限られたコミュニティでのみ用いられるスラングとしての性格が強かったようである。例えば *clicko* には単なるクリックミスの使用例もあるが、対局中のマウス誤操作による悪手（いわゆる「クリミス」）という特殊化した意味もある。これはオンライン囲碁対局サイトにおける専門用語として1990年代から継続的に使用が見える。以下に示す実例は、悪手の原因がクリックミス (*clicko*) だろうと単純なボカ (*thinko*) だろうと待ったを認める、という内容である。

(10) In similar situations online, I count to ten to allow the opponent a chance to undo, since it could conceivably be a **clicko**. Even if it is a **thinko**, I would be happy to grant an undo in such a situation, since it would make for a more satisfying game.¹⁸

こうした例が見つかるのは主に掲示板の書き込みなどであり、書籍や新聞記事などでの使用は基本的になく、コーパスでも実例は皆無に等しい。こうした語を理解できる仲間内の結束性を醸成する機能を果たしていると言える (Mattiello 2017: 153, Goldberg 2019: 61)。

4.4. 第2期：thinkoの台頭

第2期で注目されるのは *thinko* である。初出は第1期だが広まったのは第2期と見られる。この語はコーパスや新聞記事にも実例が見つかり、そして（オンライン辞書サイトや俗語辞典ではない）一般の辞書にも記載がある。管見の限り、エラーを表す-oによる語形成で一般の辞書の見出し語に採用された語は *thinko* のみである¹⁹。

(11) **thinko** noun

«informal» a mistake in one's thought processes; a mental lapse or failure to reason correctly

ORIGIN 1990s: formed on the pattern of TYPO. (*Oxford Dictionary of English*, 2nd edition, 2003)

(12) Earlier I mentioned that debugging is an inverse problem. There's a second inverse problem—which may be easier or harder than the first—which is to figure out what error in thinking led to the bug. This is important because the same **thinko** probably caused several bugs and you've only found one of them. (iWeb corpus, 2010)

¹⁸ senseis.xmp.net/?GoAndEthics

¹⁹ 俗語などに特化した辞典であれば *thinko* 以外にも立項されているケースがある。以下は *speako* の例である。

(i) A *speako* is an error in speaking, especially when dictating to a voice recognition system. It's a "spoken typo," if you will. (*The Complete Idiot's Guide to Weird Word Origins*, 2008, p 172)

(13) Geoffrey Nunberg, a linguist, distinguishes two kinds of speech mistakes: “typos” and “thinkos”. Typos are ubiquitous and listeners hardly notice many of them. Thinkos go deeper; they betray that the speaker might actually not know something. If someone says the capital of Italy is Florence, that’s probably a true thinko, unless the person is an expert in Italy who just happened to be thinking about a forthcoming holiday in Florence. But when people are caught in a thinko, they are often tempted by the “misspoke” explanation—it’s hard to prove them wrong, after all, if they say they knew the right thing but just accidentally said the wrong one. It could happen to anybody.

(The Economist, 2017, 5/13) ²⁰

1998年のOxford Dictionary of English (ODE) 初版にはthinkoが未収録だったことから、改版までの数年間に影響力のある人物による使用があったと推測される。その有力候補はデネットとナンバーグである。彼らはこの時期に相次いでthinkoがキーワードとなる文章を発表している。Dennett (2000) はミーム伝達時の誤りのことをthinkoと呼び、Dennett (2017) ではcooko (調理法の誤り) やweavo (織り方の誤り) という臨時語も使用している²¹。一方、Nunberg (2002) はthinkoを「知識・倫理の欠陥の表れ」(signs of an intellectual or ethical deficiency) とし、エコノミストもそれを踏襲している(ただし、ODEが記述するように「正しい知識はあるがうっかり誤りを犯してしまう」という状況を指す場合も多い)。ここまでの小括として、主要な語に限定して時系列順に再整理しておく。

表3. 時系列に沿った整理

1993	writo (WS, Wt) speako (WS)	2000	thinko (デネット)
1994	clicko (Wt)	2002	thinko (ナンバーグ)
1995	scanno (FOLDOC)	2003	spello (Wt) thinko (ODE 2 版)
1996	thinko, mouso, braino (FOLDOC)	2005	hearo (UD)

この第2期になると、第1期に比べて-oによる語形成が生産的になってきた様子がうかがえる。次表のように、タイプ頻度は増えたが、複数のサイトに掲載されている語は少ないからである(非慣習的な語、特にハパックスのタイプ頻度は生産性の尺度のひとつである)。たわむれに造語ただけで実際の使用例はない、あるいは僅少というケースが大半である。しいて言えばthumbboは比較的使用の見られる語と言えるかもしれない。この語はMacmillan Dictionaryのサイト上におけるBuzzWordというコーナーで取り上げられたこともある。ただしUrban Dictionaryの評価は12対130とすこぶる低く、これには相応の動機づけが指摘できる(5.1節)。

²⁰ www.economist.com/books-and-arts/2017/05/13/i-misspoke-a-weaselly-phrase

²¹ 邦訳のp.350ではthinko, cooko, weavoがそれぞれ誤義、誤料理、誤織物と訳されている。

表4. 第2期に確認される語

初出年	語形	意味	辞書サイト
2003	reado	(特にメールでの) 誤読	UD (8-2)
	wordo	単語の取り違え	UD (23-18)
2004	speech	言い間違い	UD (7-1)
2006	texto	テキストメッセージでの誤字	UD (32-9)
2007	iYpo	iPhoneでの誤字	UD (6-3)
	pasto	コピーによる誤字	UD (45-41) MWOD ²²
	itso	itsとit'sの取り違え	UD (9-2)
2008	talko	言い間違い	UD (11-11) MWOD
	grammo	文法のミス	UD (10-2)
2009	plago	剽窃 (plagiarize) による誤字 ²³	MWOD
	spellchecko	スペルチェッカーによる誤字	UD (1-0)
	spypo	言い間違い	UD (3-2)
	thumbo	親指での文字の打ち間違い	UD (12-130) WordSpy

(14) How do you get rid of **thumbos**, those cellphone message typos? Practice. And some handy tips.

(Macmillan Dictionary BuzzWord²⁴)

4.5. 第3期：裾野の広がり

第3期では、上の表4で見たような周辺的な語が引き続き多く観察される。Urban Dictionaryの投票総数・賛否評価を見る限りでは慣習性・容認性の低い語ばかりで、実例も皆無に近い。この時期の特徴は世界の著しい変化である。スマートフォンやSNSが普及し、辞書サイトもアクセスが容易になった。スマートフォン関連のミスを表す新語が増えるのはこの時期である。以下はすべてUrban Dictionaryからの例であり、複数のサイトに立項されるような語はない。

(15) 口頭でのエラー

2010	vypo (6-0)	言い誤り (<verbal typo)
2011	saypo (12-0)	同上 (<say + -o)
2014	sayeo (1-0)	同上
2017	say-o (0-1)	同上

²² paste-oという綴りで投稿されている。

²³ MWODの記述をすべて掲載しておく。

(i) plago (noun): [plagiarize + typo] a remnant of a previous computer file or text that unintentionally remains in a document

Submitted by: Kevin Robison from New York on Jan. 19, 2009 11:22

²⁴ www.macmillandictionary.com/buzzword/entries/thumbo.html

(16) スマートフォン・SNS関連のエラー

2010 typho (5-1)	iPhoneなどの予測変換による誤字
2014 tappo (5-1)	タップ操作 (tap) の誤り
2010 swypo (67-34)	スワイプ操作 (swipe) の誤り
2017 swipo (1-0)	同上
2017 emopo (1-0)	絵文字の誤選択 (< emoji)
2018 GIFO (0-0)	GIF画像の誤選択

(17) その他のエラー

2010 drypo (0-0)	飲酒時の誤字 (< drunken)
2012 Braillo (0-0)	点字キーボードでの誤字 (< Braille)

4.6. 全体的な議論

-oによる新語は、その使用例を見る限り、モデル語**typo**と対比するなどして造語であることが明示されることが多く、これは新語の一般的な傾向と一致している (Renouf 2018)。特に次例のように条件文の後件で**o**を使った新語を導入することにより、 $A : B = C : x$ のような四項類推 (four-part analogy) を明確化するケースが多く見られる。

(18) If a mistake while typing is a **typo**, then is a mistake while writing a **writo**? LOL!²⁵

メタ言語的使用でない純粹な実例は概して少ないが、創造的な言語使用の盛んなツイッターや、特定の語が慣習化しているコミュニティ (clickoが普及しているオンライン囲碁サイトなど) においてはその限りでない。

また漠然性も観察される。例えば**speako**は人間の言い誤りにも (= (19))、音声認識デバイスでの書き起こし間違いにも (= (20)) 使われうる。これは慣習的な多義性 (polysemy) ではなく漠然性 (vagueness) と思われる。つまり、非慣習的だからこそ解釈が開かれているのである。これは新規のNN複合語に多様な解釈が可能であることと同様の現象である。

(19) Gruber's speeches are incredibly consistent in content and structure. No **speakos**.²⁶

(20) This machine is a master of **speakos** and mondegreens. [...] my tablet has changed [...] "I truly couldn't see" to "a cruelly good emcee."²⁷

²⁵ twitter.com/Jenesyde/status/257737500452343808

²⁶ twitter.com/kerpen/status/493150048012627968

²⁷ www.nytimes.com/2007/01/07/books/review/Powers2.t.html

ある概念がどうコード化されるかという名づけ (onomasiology) の観点から見ると、口頭でのエラー (言い誤り) および絵文字の誤選択を指す語は、エラーを表す-o以外の語形成も含め、変種が大量に見つかる。こうした概念を簡潔に表すことへの高い需要の表れと考えられる。

(21) 口頭でのエラー

破片辞-o : speccho, say-o, sayeo
-(y)po : saypo, spypo, Vypo
複合語 : tongue typo, vocal-typo, verbal typo, mouth typo

(22) 絵文字の誤選択

-(y)po : emopo, smypo
-oji : typoji, erroji
複合など : emotypo, smiley typo

これに関連して形式の揺れと復元性を考えよう。Bauer et al. (2013) では破片辞による語形成一般について形式の揺れがあると指摘する。たとえば破片辞-tainmentはedutainmentのような形のほか、kid-ertainmentといった形も確認される。破片辞-oも第3期になると-po (e.g. emopo) や-ypo (e.g. swypo) などが確認されるため、形式の揺れの存在が明確になる²⁸。この-poや-ypoはモデル語であるtypoの要素を-oだけの場合よりも多く保存しているが、全体の割合からすると、-oだけの方がずっと多い。Mattiello (2017) のいう復元性は、少なくともtypoにまつわる語形成に関してはさほど重要ではないと言える。

また本稿ではこれ以上立ち入らないが、エラー概念のコード化に用いられる別の表現との比較も研究の方向性としてはありうる。現代英語で十分に慣習化している接辞mis-のほか、Freudian N (Urban DictionaryではFreudian clickとFreudian swypeが立項されている) やslip of Nといった表現もエラーを表す-oと関連すると思われる。

まとめると、本節ではオンライン辞書サイトを利用し、先行研究の報告よりも遥かに多くの語が存在することを指摘し、時期ごとの特徴を述べた。次節はこれらの語に対して記述を行い、中心的な語 (speakoやclickoなど) と周辺的な語 (mousoやspellcheckoなど) を正しく区別できるような記述を提示する。

5. 記述

5.1. 意味について

意味記述にあたって次の3つを区別する。すなわち (i) 破片辞-oの意味、(ii) 語全体の意味、(iii) 語基の意味である。まず (i) 破片辞-oの意味はマッティエッロの記述を踏襲し「エラー」と

²⁸ これは破片辞による語形成と混成 (blending) との関係を示唆する。swypoをswyp(e)と-oの結合だと見れば前者、swyp(e)と(t)ypoのオーバーラップと見れば後者である。

考える。より詳しくは「不作為」あるいは「意図しない結果」（西村 1998: 162-177）と特徴づけられよう。オンライン囲碁におけるクリックミスや、スキャン時のOCRで生じる誤字などは、意図したものでなくても本人が一定の責任を負うことになるのである。

次に (ii) 語全体の意味を考えよう。バウアーらの記述を参考に、**typo**の持つ意味要素を下表のように分類する。すると、語全体が持つ意味要素としては「エラー」以外にどれも必須とは言えず、結果的に**typo**（の持つ意味要素）を典型とした放射状カテゴリーをなしている。

表5. 語全体が持つ意味要素

	PC関連 ²⁹	言語	産出
typo	○	○	○
clicko	○	x	x
thinko	○	○	○
writo	x	○	○

バウアーら自身は「言語産出エラー」を-o単体の意味に帰しており、過少生成を招く結果になっていた。むしろ「言語」や「産出」などは語全体が随意的に持つ意味要素だと考える方が言語事実に即した記述になる。また「PCで文章入力する際の考え違いによる誤入力」を表す**thinko**は**typo**との共通性がきわめて高い。-oによる新語の中でも特に**thinko**が慣習化しているが、この共通性の高さがその一因だと考えられる。

続いて (iii) 語基の意味も同様に考える。ここでの語基 (base) とは-oの付加相手 (**typo**なら **type**、**scanno**なら**scan**) をいう。再び意味をいくつかの要素に分けて考えてみよう。

表6. 語基が持つ意味要素

	行為	人間	意図的
type	○	○	○
hear	○	○	x
scan	○	x	-
mouse	x	-	-

ここでも**typo**の語基**type**を典型例としたカテゴリーが成立していることが分かる。なお行為、人間、意図的という3つの要素は独立でなく、右の要素が左の要素を含意する関係にある（行為であれば人間によるものか、もしそうなら意図的の行為か）。したがって、行為であるかどうかが決定的な要因ということになる。

²⁹ 簡潔さを優先して「PC関連」としたが、厳密には「デジタル機器関連」のようなカテゴリーが想定され、そのなかでPCが中心事例、スマホなどが周辺事例ということになる。

人間自身の行うタイピングなどとは違い、スキャン（および文字認識）は直接的には機械が行うものである。またmouseは「マウスを操作する」という行為も指しうるが、道具を指すのが普通である。したがってmousoとbrainoの廃用も、Urban Dictionaryにおけるthumboやitsoなどの低評価も、いずれも語基が行為でないという点に帰することができる。

いくつか断っておくと、ここでの議論は典型性を指摘してより言語事実に即した記述をするためのあくまで暫定的なものである。さらに細かく意味要素を認定することが可能であることは否定しない。もちろん、意味記述が成分分析に尽きるという立場も採らない。上で想定した意味要素に加え、PCや文字入力などにまつわる百科事典的な知識も持っていなければ、本稿が扱うような語の十全な理解が望めないのは自明である。これ以上は立ち入らないが、別の角度からの整理としてフレームの考慮も有効だろう。writoやspeakoは「デジタル機器での文書作成」というフレームから手書きや口頭発話のフレームへ写像が行われている一方、thinkoやthumboはデジタル機器での文書作成というフレームのなかで、誤字が起きる原因（考え違い）や文字入力に用いる身体部位（親指）を精緻化しているわけである。

5.2. 形式について

形式の面でもtypoに倣った典型性が観察され、新語の容認性を左右している。まず指摘できるのはtypoにおける-oが持つ「語末生起」と「非自立性」（ないし拘束性）という性質である。これに違反すると容認性は極端に悪くなる。例えば次のような形式は見つからない。

- (23) a. 語頭：*oclick（意図した意味：クリックミス）
- b. 自立：*this o（意図した意味：このエラー）

ただし、これはあらゆる破片辞に当てはまるものではない。下に示すように、よく言及されるburgerのほかにも、自立用法のある破片辞はいくつか存在が指摘されている（括弧内のモデル語は引用者が補足した）。

(24) 破片辞の自立用法

- scape* ‘view, picture or scenery’ (< landscape)
 - thon* ‘long fundraising event’ (< marathon)
 - holic* ‘fan, addict’ (< alcoholic)
 - gate* ‘scandal, affair’ (< Watergate)
- (Callies 2016: 509)

語基の音節数についても同様の指摘ができる。typoの語基typeは単音節であるため、そこから逸脱して二音節以上の語基に-oを付加すると、新語の容認性は下がる。ただし、これも絶対に不可というわけではなく、文脈の支えや意味的な整合性があれば、一応実例は見つかる。

(25) Leland and Kirsten's exchange about typos reminded me of a talk Doug Hofstadter gave at Indiana ten years ago, describing his collection of varying kinds of slips derived from typos. He was into electronic conversations [...] and had started noticing the kinds of errors that cropped up. He moved on to discuss errors beyond the **typo** -- the **speako**, the **writo**, and ultimately the **conceivo** [...].³⁰

本稿は-oの付加に見られる特徴を、厳密な制約というより傾向として捉えている。そのため、こうした語の存在が少数である限り、語基は単音節だという記述の反例にはならない。むしろこうした語の容認性が低いことを正しく説明できる。表3を見返すと、Urban Dictionaryには語基が単音節でないspellcheckoが立項されているが、この語も上のconceivoと同じく極端に周縁的であり、実例は見つからない。

5.3. 記述のまとめ

本節で提示した意味・形式における典型性に基づく記述に従うと、先行研究に見られた過剰生成・過少生成（すなわち「エラー」では広すぎ、「言語産出エラー」では狭すぎる）を大幅に改善できる。

ひとつ注意されたいが、典型性に則った-oによる語形成パターンが（非明示的にであれ）あらゆる母語話者に言語知識として備わっているとは主張していない。あくまでも個々の話者が独立にエラー概念を新語で表現しようとして語形成を行った結果として創発した特性（emergent properties）が、本節で見た典型性だと思われる。たとえ個々人がやみくもに造語をしても、理解されにくい形式は再使用されずに淘汰される。すると、一定の普及をみた語には全体として一定の合理性を備えたパターンが観察されるというわけである。例えば第1期にはmousoとbrainoという語基が行為でない語が用いられていた。当時は-oによる語の総数が少なく、また使用域もごく限られていたため、現代と違って周縁的とは感じられなかったものと思われる。しかし-oによる語形成が拡大するにしたがって、徐々に-oの付加方法にパターンが明確化したため、そこから外れた両語は結果的に廃れていったわけである。

2020年代以降、この-oによる語形成パターンがどう展開していくか（典型からはみ出す大胆な語形成に発展する、一過性の流行として廃れていくなど）については、今後の検証に委ねられる。

6. 説明

前節までの観察・記述に続いて、本節では説明を行う。エラーを表す-oによる語形成をめぐる説明を要する点には少なくとも以下の3つがある。特に2点目は、究極的には心理実験などで検証すべき事柄だが、そのためには仮説が必要である。あくまで示唆に留まるが、なるべく妥当と思われる説明を順に提示していく。

³⁰ groups.google.com/forum/#!original/bit.listserv.mbu-l/v7NM5QZKaf4/UCNHL-CnpOYJ

- (26) 1. なぜtypoを中心とした典型性が見られるのか
2. なぜ-oによる新語は理解可能か（あるいはなぜ理解しにくいのか）
3. なぜ-oは破片辞になったか（あるいはなぜ破片辞に留まって自立しないか）

6.1. 典型性について

-oによる新語の意味と形式には、なぜtypoを中心とした典型性が見られるのだろうか。文章作成とは関係のない行為にもエラーは起こるはずである。この点については被覆度（coverage）の概念が有用と思われる（Goldberg 2019: 4章）。これはある構文の事例が概念空間内でどれだけ分散しているかの尺度である。個々の事例の性質が多様であれば分散していることになり、それらを包含するカテゴリーは大きくなる。すると新規事例もその中に収まりやすく、認可されやすい（つまり生産性が高い）。本稿で言うと-oの事例で慣習的と言えるのはtypoとthinkoくらいであり、カバー範囲がきわめて狭い。したがってtypoから逸脱する語は認可されにくい。これは分析者の立場からの説明であるが、使用者の観点からすると、typoから逸脱するような概念は-oで表すことの必然性が感じられにくい、-oを使って表現してよいと自信を持ってないのである。もし今後、typo以外の語が多く慣習化することがあれば、-oの付加に見られる典型性も弱まるという予測になる。

とはいえ典型性が見られるというのは、モデル語との差異化を図る語が次々と作られていることの結果でもある。事例が複数あるからこそ典型性が生じるわけであり、typo以外に新語が作られなければ典型性がそもそも問えない³¹。では、何がこれを動機づけているのだろうか。言語産出の際にエラーが生じるという経験は日常生活の中でありふれたものである。つまりtypoにまつわる概念は新語によってコード化し分けられる素地があるといえる。逆に、非日常的な経験（例えばトナカイの捕獲にまつわるエラー³²）を細かく表し分けることは考えにくい。表すにしても普通は句などを用いて迂言的に表現すると考えられる。

6.2. 意味解釈について

-oによる新語はどのような仕組みで理解されるのだろうか。前提として、語基は既知の語であるとする。すると、解釈にあたってはその語基の意味と-oの意味とを合成することになる。問題は、多くの人にとって-oという形式にエラーという意味が慣習的に結びついていない点で

³¹ 破片辞がそれとして認識されるためには一定のタイプ頻度が必要だろう。脚注28で破片辞による語形成と混成の近さを示唆したが、両者の違いのひとつはタイプ頻度だと思われる。タイプ頻度が増えるにしたがって固有の形態素が繰り返し生起していると認識されやすくなるわけである。

³² トナカイの捕獲についても、手元が狂う、目測を誤る、対象を誤認する、など多様なエラーが考えうる。しかし（少なくとも英語や日本語の言語共同体において）トナカイの捕獲は文章作成と比べ遥かに非日常的な営みであり、それゆえ細かい語彙化はなされない。一方、将棋は（少なくとも日本語の言語共同体においては）比較的日常的に行われており、それに応じてエラーにまつわる概念が細かく語彙化されている：ボカ、疑問手、失着、頓死、手拍子、読み抜け、手順前後、一手ばったりなど。

ある。したがって、-oという形式からtypoを想起し、それを經由して「エラー」の意味にたどり着く必要がある。

知覚のレベルでは、実際には見えていない部分を補って知覚する補完 (completion) という現象が知られる (坂本 2019)。言語理解における例をあげると、f*kなどの伏せ字が理解できるのは補完によるものと考えられる。破片辞は基本的に打ち言葉であるため、視覚的に処理される。もし破片辞による新語を見た時、背後にモデル語が隠れているように感じられるとすれば、知覚的補完が働いている可能性がある³³。

また認知のレベルでいえば、ある種の推論が働くと考えられる。与えられた状況からそれが生じるまでの来歴や前提を推論でさかのぼるとするのは、未知語の理解に限ったことではない。ある種のテイル形や直喩表現などでもこの種の推論が働いているだろう。

- (27) a. 財布が落ちている
b. 雑巾みたいな味

(27a) は先行する落下事象を目撃していなくても発話可能であり、現状 (e.g. 路上に財布がある) から過去の状態にさかのぼるタイプの推測をしていることになる。(27b) も、雑巾を味わった経験がなくても発話可能であり、現状 (e.g. 何かしらの不快な味) から直喩の前提となる雑巾の味を推測していることになる。「あべこべの直喩」に関する議論 (佐藤 1992 : 72) も参照のこと。こうした仕組みによってモデル語のtypoが想起できれば、あとは語基の表す意味 (典型的には人間が意図的に行う何らかの行為) と整合的な合成をすればよい。

ただし補完や推論が働くにしても候補の絞り込みが必要である。英語には-oで終わる語がtypoだけでなくhero, piano, radio, tomatoなど複数あるからである。首尾よく絞り込まなければ、「エラーを表す-o」のことを「トマトを表す-o」などと誤解する恐れがある³⁴。これについては当該語の置かれた文脈を参照することによって、おのずと脱曖昧化されるものと考えられる。本稿冒頭のscannoの例を改めて確認しよう。

- (28) The content is enthralling. However, there are numerous instances of the word “time” being wrongly used for “the”; this situation becomes increasingly annoying with each additional instance. There are also many other errors which may be scannos. Proofreading is needed. = (1) の再掲

本例ではsacnoの使用に先行して“...wrongly used...”というエラーを喚起する表現がある。それによってtypoの想起は促進され、tomatoなど他の潜在的な候補は抑制されることになるだろう。

³³ clickoなどエラーを表す-oで語基の背後にtypoが感じられる場合、comboなど用法1の-oでは-oの背後に省略された語末部分を感じられ、goodoなど用法2・3では重複や遮蔽はなく、単に語基と接辞が隣接しているだけと感じられる可能性がある。

³⁴ これは補完一般に生じる問題であり、重なり合っていない部分の復元方法は一意に決まらない。これを坂本 (2019 : 154) は「遮蔽図形の理解は不良設定問題」であるとまとめて解説している。

実際、母語話者であれば意味を突き止めることは大して難しくないのである。その旨を報告するメタ的なコメントがウェブ上で見つかる。

(29) Aaron wrote [...] that he wanted to coin the word "clicko," defined as being like a typo but with an accidental mouse click instead of a keystroke. I love this word because **you instantly recognize what it means.**³⁵

その一方で、バウアーらが報告するように、破片辞の理解には処理労力がかかるという直感も見逃せない。これは意味解釈手がかりの相対的な少なさが原因だろう。verbal typoなど複合語であれば意図が伝わりやすいが、typoのうち-oしか残存していないと、それだけ解釈手がかりが少ない(復元性が低い)わけである。これには積極的な効果もある。-oによる新語は打ち言葉であり、理解しやすさを犠牲にしてふざけた感じを出す語形成 (playful morphology) といえる。あえて解釈しづらい形式を用いることで、理解できる話者間の仲間意識を醸成している面があることは4.3節で述べた通りである。

6.3. 破片辞化について

最後に、なぜ-oは破片辞になったか(あるいはなぜ破片辞に留まっているか)を考えよう。ある語の一部が再分析を受けて破片辞となる過程には相応の動機づけがあると思われる。まず(ほぼ自明だが)切り出す余地のないほど短い語や、丸ごと非分析的にしか捉えられないような語は破片辞になりえない。typoは再分析が生じるために必要な最低限の長さを備えていたと言える。

また、もともと英語話者の共同体(特に英国・オーストラリア英語)には既存語に-oをつけるという言語的慣習が存在していた点が指摘できる。たとえばマザーグースにもこのタイプの語形成が見られ(e.g. *You wives and maids give ear-o*)、近年でも商品名などに使用されている(e.g. hearO [スピーカーの名称³⁶])。このことが、エラーを表す-oによる語形成に踏み切ることの心理的抵抗を軽減している可能性がある。

とはいえ、エラーを表す-oが他の破片辞に比べて短いのも事実である。表1に挙げた破片辞を見ると、その大多数が複数音節である。この点が破片辞に留まるか自立語化するかの違いだと考えられる。

7. おわりに

本稿は新規形態素-oによる語形成を考察した。本稿の意義は、今まさに起きている創造的な言語変化を記録し、記述、説明したところにある。これを契機に、破片辞による語形成の詳細説明が進めば、人間の語彙知識のより深い理解につながることを期待される。

³⁵ fiwk.blogspot.com/2009/09/clickos.html

³⁶ www.hearospeaker.com/

参考文献

- Bauer Laurie, Lieber Rochelle, Plag Ingo (2013) *The Oxford reference guide to English morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Bromberger, Sylvain (2011) What are words? Comments on Kaplan (1990), on Harthorne and Lepore, and on the issue. *Journal of philosophy* 108: 486-503.
- Callies, Marcus (2016) Of soundscapes, talkathons and shopaholics: On the status of a new type of formative in English (and beyond). *Language typology and universals*, 459-516.
- Dennett, Daniel (2000)/(2006) “From typo to thinko: When evolution graduated to semantic norms” In: Stephen Levinson and Pierre Jaisson (eds.) *Evolution and culture*, 133-145. Cambridge, MA: MIT Press.
- Dennett, Daniel (2017) *From bacteria to Bach and back: The evolution of minds*. New York: W. W. Norton and Company. 木島泰三 (訳) 『心の進化を解明する：バクテリアからバッハへ』東京：青土社. 2018年.
- Goldberg, Adele (2019) *Explain me this: Creativity, competition, and the partial productivity of constructions*. Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- 萩澤大輝 (2018) 「素朴理論から見る認知形態論」『東京大学言語学論集』(TULIP) 40: 21-38.
- Jespersen, Otto (1922) *Language: Its nature, development and origin*. London: George Allen and Unwin. 市河三喜・神保格 (訳) 『言語。その本質・發達及び起源』東京：岩波書店. 1927年.
- Kaufman, Leslie (2013) For the word on the street, courts call up an online witness. <https://www.nytimes.com/2013/05/21/business/media/urban-dictionary-finds-a-place-in-the-courtroom.html> [accessed July 2019]
- 興石哲哉 (2018) 「形態変化・語彙の変遷」服部義弘・児島修 (編) 『歴史言語学』(朝倉日英対照言語学シリーズ 発展編3) 106-130. 東京：朝倉書店.
- López Rúa, Paula (2007) Keeping up with the times: Lexical creativity in electronic communication. In: Judith Munat (ed.) *Lexical creativity, texts and contexts* (Studies in Functional and Structural Linguistics, 58), 137-162. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamin.
- Mattiello, Elisa (2017) *Analogy in word-formation: A study of English neologisms and occasionalism*. (Trends in linguistics. Studies and monographs 309). Berlin: De Gruyter Mouton.
- 西村義樹 (1998) 「行為者と使役構文」中右実・西村義樹『日英語比較選書5 構文と事象構造』107-203. 東京：研究社.
- 野中大輔・萩澤大輝 (近刊) 「語形成への認知言語学的アプローチ：under-Vの成立しづらさと under-V-edの成立しやすさ」岸本秀樹 (編) 『レキシコンの現代理論とその応用』東京：くろしお出版.
- Nunberg, Geoffery (2002) “Going nuclear,” *Fresh Air* commentary. <http://people.ischool.berkeley.edu/~nunberg/nuclear.html> [accessed July 2019]
- Peters, Pam (2007) *The Cambridge guide to Australian English*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Renouf, Antoinette (2018) Investigating the circumstances of coinage. In: Sebastian Hoffmann, Andrea Sand, Sabine Arndt-Lappe, and Lisa Marie Dillmann (eds.) *Corpora and lexis*, 40-68. Leiden / Boston: Brill.
- Roberts, Jane and Louise Sylvester (2017) “Blunder, error, mistake, pitfall: Trawling the OED with the help of the historical thesaurus.” *Altre modernità*, 18-35. <https://doi.org/10.13130/2035-7680/8299>. [accessed July 2019]
- 坂本一寛 (2019) 『創造性の脳科学：複雑系生命システム論を超えて』東京：東京大学出版会.
- 佐藤信夫 (1992) 『レトリック感覚』 (学術文庫版) 東京：講談社.
- Warren, Beatrice. 1990. The importance of combining forms. In: Wolfgang Dressler, Hans Luschützky, Oskar Pfeiffer, and John Rennison (eds.), *Contemporary morphology*, 111-132. Berlin: Mouton de Gruyter.

Word-Formation Based on *Typo*

HAGISAWA Daiki

hagisawa_daiki@yahoo.co.jp

Keywords: reanalysis, splinter, secretion, netspeak

Abstract

A certain word-formation pattern is observed in Present-Day English (especially in the Internet discourse), namely the addition of *-o* to action-denoting words. This is a novel morpheme (of the kind known as a splinter), based on a reanalysis of *typo*, with the meaning “error.” The literature on this morpheme has not yet provided sufficient observations, descriptions, or explanations to prevent the pattern from over- and under-generating. The present article observes many more attested instances, presents a better description, in which *-o* words represent a radial category with *typo* at its center, and tentatively proposes explanations for several issues related to the phenomenon.

(はぎさわ・だいき 神戸市外国語大学大学院)